

『源氏物語』賢木巻、葵巻に取材した能(野宮)は、六条御息所の屈折した心情を描き出した名品として高く評価されている。「野宮」とは斎王になる未婚の内親王が、斎宮(伊勢)、斎院(賀茂)に移る前の一年間、潔斎のために籠るところで、斎宮の場合は嵯峨野、斎院の場合は紫野であった。六条御息所の娘は、斎宮に定められたので、本曲では、嵯峨野が舞台となっている。

能(野宮)の作者については諸説あるが、近年は金春禅竹(二四〇五年―一四七〇年前後)作とする説が有力である。その梗概は次のようなものである。

## 梗概

旅の僧(ワキ)が京都嵯峨野の野宮の旧跡へ参拝すると、女(前シテ)が現れ、この野宮は、昔、六条御息所が伊勢の斎宮となった娘とともに籠ったところだと話して聞かせる。御息所は、皇太子妃として華やかな日々を送った女性であったが、夫に死別し、その後に愛を得た光源

氏からも見捨てられて、寂しい身の上となり、涙ながらに伊勢に赴いたのだという。そのように語った女は、実は自分がその六条御息所なのだと言乗って姿を消す。夜になると、御息所の霊(後シテ)が現れ、賀茂の祭り見物の折に、車を据える場所を光源氏の正妻である葵上と争って恥辱を受けた車争いの思い出などを物語り、僧に、妄執からの救いを請い願う。御息所は懐旧の舞を舞い、やがて去つてゆくが、迷いの世を離れ得たかどうか……。

## 典拠

本曲の前半は『源氏物語』賢木巻を踏まえており、九月七日に野宮を訪れた光源氏と六条御息所との対面場面を物語本文に沿う形で表現している。しっとりとした物哀れな嵯峨野の秋の風景は、『源氏物語』では、「秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれる虫の音に、松風すぐく吹きあはせて」と表現されており、花は萎れ、草は枯れ、虫の音も弱つて、松風の音が物寂しく聞こえているという様子はすでに冬のようなのである。

そしてこうした物悲しい風景は、おのずと六条御息所の心象風景と重なって効果的である。

さらに、野宮に特有のものとして、小柴垣や、黒木の鳥居、火焼屋などが挙げられている。小柴で作った低い垣や、皮のついたままの丸太で作った鳥居、衛士が警護のために篝火をたく小屋など、質素ながら、神域らしい風情を持ったこれらの建造物は、能(野宮)の詞章の中にも取り込まれており、特に黒木の鳥居は作り物として出されて舞台に情趣を添える。

本曲後半の詞章は、六条御息所が、車に乗って現れたかのような表現を取っている。現在の金剛流では「車出之伝」という特殊演出の場合にのみ、車の作り物を出すのが、かつては、黒木の鳥居のみ出す、車のみ出す、両方とも出すという三様が並行して行われていたらしい。

さて、本曲後半で、六条御息所が語る車争いの典故は『源氏物語』葵巻である。賀茂の新斎院が賀茂河原に出て御禊をする日、光源氏は特別にその行列に供奉することになり、懐妊中の葵上は女房たちにせがまれて見物に出かけた。そこには御息所も姿をやつして見物に来ていたが、左大臣家の権勢を笠に着た葵上の従者たちが、御息所の車にさんざん乱暴を働く。御息所は人目を忍んでやって来たのに、源氏への断ち切りがたい未練を人々に知られてしまった上、正妻との地位の差を見せつけられるという屈辱を味わう。誇りを傷つけられ

た御息所は思い悩み、生霊となって葵上を苦しめることになるのであった。

#### 能(葵上)と能(野宮)

この車争いに起因する六条御息所の恨みに焦点を当てた能に(葵上)がある。梗概は次の通り。朱雀院の臣下(ワキツレ)が、葵上の病因を知るために、巫女(ツレ)に梓弓の法を行わせると、梓の弓の音に引かれて貴婦人(前シテ)が現れる。女は六条御息所の怨霊と名のり、恨み言を述べ、悔しさのあまり、葵上(舞台上に広げて置かれた小袖が葵上を表す)を激しく打ちたたき、姿を消す。葵上の容態が急変したため、横川の小聖(ワキ)が呼ばれ、祈りが行われる。御息所の霊は鬼の姿(後シテ)となって現れ、小聖に立ち向かうが、ついに調伏される。

(野宮)と(葵上)は、どちらも六条御息所を主人公とするが、その趣は大きく異なる。『源氏物語』本文に沿った形で作られている(野宮)に対し、(葵上)は物語に基づきながらも、梓巫女や横川の小聖など、原作にない人物を登場させ、劇的な構成にしている。また(野宮)の御息所は、葵上への恨みを直接に表現することはなく、車争いで恥辱を受けた身を「憂し」と嘆くのに対

し、〈葵上〉の御息所は「恨み」「恨めし」の語を繰り返して、葵上を打たずにはいられず、とうとう鬼の姿を現す。恨みを沈潜させた静かなあきらめの中で涙に暮れる〈野宮〉の御息所と激しい怒りの炎に身を焦がす〈葵上〉の御息所。内により深い苦しみを秘めているかのよう、救いを得たのかどうかわからないまま消えてゆく〈野宮〉の御息所の霊と、聖との激しい争いの末に敗北し、かえって成仏を約束された〈葵上〉の御息所の霊。二つの作品は、悲嘆と瞋恚、静と動、暗と明のごとく対照的な面をも持っているのである。

### 森と花

実は、〈野宮〉二曲の中にも、ある対照が見られるように思われる。それは「森」のイメージと「花」のイメージの対照である。〈野宮〉の詞章には、「森の木枯らし」「森の蔭」「森の下道」「森の木の間」「森の木蔭」「森の下露」のように、「森」の語が何度も繰り返される。『源氏物語』賢木巻には「野辺」「浅茅が原」といった語が見えるだけで、荒涼とした広い野原のイメージで捉えられる野宮周辺が、能〈野宮〉においては、暗く深い闇に閉ざされた森のイメージで描かれているのであった。木々の作り出す濃い闇とかすかに漏れ来る月の光は、御息所の複

雑な心情をよく表しているよう。

一方の「花」について、〈野宮〉では前シテの登場に「花に馴れ来し野の宮の 花に馴れ来し野の宮の 秋より後は如何ならん」と歌われ、後シテの登場場面では「野の宮の秋の千草の花車 われも昔に 廻り来にけり」と歌われる。すなわち、『源氏物語』本文で、「秋の花みなおとろへつつ」（この箇所は〈野宮〉にも引用されている）とされている通り、光源氏が野宮を訪れたのは、草花も枯れつつある季節ではあるが、能〈野宮〉のシテは、美しい秋の花々に彩られてこそ登場するのである。かつて、御息所は、皇太子から愛され「時めく花の色香まで 妹背の心あさからざりしに」という様子であったが、今は「心の色は自づから 千草の花にあらはれて 衰ふる身の習ひかや」と嘆くように、光源氏からも見捨てられて、心は花が色あせることと萎れてしまった。咲き誇る花は、御息所の栄華と幸福とを暗示し、萎れた花と闇に閉ざされた森に対置されることで、御息所の悲しみが一層鮮やかに浮かび上がってくる。

暗い森の蔭とかすかな月の光、美しく咲き乱れる色とりどりの花々と無残に萎れてゆく花々。森と花のイメージは、それぞれの内に光と影とを抱えながら、能〈野宮〉の中で重層的な対照を織りなしていると言えるのではないか。

『源氏物語』の享受史の中で

『源氏物語』は、後の文芸に多大な影響を与えたが、〈野宮〉で描かれる、嵯峨野における光源氏と六条御息所の対面や賀茂祭りの車争い事件も印象的な場面として様々に取り上げられている。たとえば、一条兼良（二四〇二年〜一四八一年）の編んだ連歌の寄合集『連珠合璧集』には、「野宮」の寄合語（縁のあることば）として、「別 松風 秋の草 浅茅原 虫の音 小柴垣 板屋 黒木の鳥居 神月の入方 神づかさ 火焼屋 物の音 しめの外 夕月夜 西川の御祓 長月 さがの山 有栖川」の十九語が挙げられているが、最後の二語を除く十七語が、『源氏物語』賢木卷による寄合語である。さらにこのうち、「別」「板屋」「月の入方」「神づかさ」「物の音」「しめの外」を除く十二語が、能〈野宮〉にも用いられている。さらに遡って、鎌倉時代中期以降、関東の武士を中心に歌われた長編歌謡である早歌（そうか）にも、『源氏物語』から多くの引用が見られるが、賢木卷の引用としては、「霜」という曲の中に「秋の草みなおとろへて 浅茅が原も虫の音も 枯々になる夕暮れ つきせず哀れなりしは 野の宮の深き夜の 入方の月の影にしも」の一節が見える。また「旅別秋情」の曲の最後は「野の宮の秋の哀れ 秋の名残をしたひてや 伊勢まで遙かにおもひおくりけむ」で結ばれるが、深

まる秋、移ろう恋と旅の別れを融合させたこの曲の情趣を、具象化するように立ち現れてくる六条御息所の姿は、深い思いを内に秘めた能〈野宮〉のシテの先駆と言つてもよいであろう。

早歌「車」の曲には「桐壺の更衣（てんころも）の宣旨 葵の上の車争ひ」の一節が見えるが、この一節は、永正十五年（二五二八）に成立した小歌集『閑吟集』（かきんしゅう）に収められていて、室町小歌として独立した形でも歌われていたらしい。『源氏物語』の車争い事件が広い範囲の人々に知識として共有されていたことを示す一例になろう。

以上、見てきたように、能〈野宮〉は、『源氏物語』の享受史において繰り返し取り上げられ、人々によく知られていた場面を用いながら、物語本文には見られなかった森のイメージと咲き誇る秋の花のイメージを巧みに織り込んで、哀れで優艶な世界を作り上げたのである。